

装置を適用した。本症例ではロケーターアパットメントを用いたIODを選択することにより良好な維持力が得られ、原発巣の経過観察を行う上でも有効な治療法であった。

### 3. 歯科用コーンビームCTを用いた埋伏下顎第三大臼歯歯根の観察

Evaluation of the impacted mandibular third molars' root using dental cone beam CT

○池田 裕之介, 小川 淳, 泉澤 充\*, 高橋 徳明\*, 矢菅 絵里加, 古城 慎太郎, 川井 忠, 宮本 郁也, 藤村 朗\*\*, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座口腔外科学分野, 岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座歯科放射線学分野\*, 岩手医科大学歯学部口腔医学講座歯科医学教育学分野\*\*

**目的:** 安全な抜歯の一助とするために、歯科用コーンビームCT (CBCT) を用いて埋伏下顎第三大臼歯の歯根形態を検索した。

**材料と方法:** 209名323歯のCBCTで歯根形態を評価後、同一歯のパノラマX線画像(パノラマ)を読影し、モダリティ間における診断の一致率を算出した。

**結果:** CBCTでは、歯根数は2根が73.4%と多く、次いで単根が13.6%、3根が3.4%の頻度でみられた。また、槌状根の頻度は7.4%、槌状根と過剰根の随伴が2.2%、90度以上の歯根湾曲が3.4%の頻度で検出された。CBCTとパノラマにおける診断の一致率は、単根が93.2%、2根が89.3%と高かったが、3根と歯根湾曲の一致率はそれぞれ9.1%と18.2%、パノラマでは槌状根と過剰根は診断出来なかった。

**結論:** 本研究により埋伏下顎第三大臼歯の歯根形態に関する詳細な知見が得られた。

### 4. 顎骨の保存的治療が奏功した小児下顎エナメル上皮腫の1例

A case of the childhood mandibular ameloblastoma that the conservative treatment of the jawbone succeeded

○石川 雄大, 川井 忠, 角田 直子, 小松 祐子, 小幡 健吾, 橋口 大輔\*, 泉澤 充\*\*, 武田 泰典\*\*\*, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座口腔外科学分野, 岩手医科大学歯学部口腔保健育成学講座小児歯科学分野・障害者歯科学分野\*, 岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座放射線学分野\*\*, 岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座臨床病理学分野\*\*\*

**緒言:** エナメル上皮腫は歯牙腫に次いで多い歯原性腫瘍で、発育は緩慢、自覚症状に乏しいことから広範囲に進展することが多いとされている。われわれは、顎骨の保存的治療が奏功した小児下顎エナメル上皮腫の1例を経験したので報告する。症例概要: 患者は9歳の女児、左側下顎の著明な腫脹と開口障害を主訴に当科を受診した。既往歴は、特記事項なく、体温37.3℃。口腔外所見は、開口量は15mm、左右非対称、知覚鈍麻症状なし、左頬部の腫脹、発赤、圧痛を認め、口腔内所見でも、左側下顎臼歯部に発赤、腫脹、圧痛が見られた。血液検査所見では、WBC、CRP、NEUTのそれぞれ高値を示しており急性炎症の所見だった。

**経過:** 初診日、入院時にセフメタゾール0.5g/dayを静脈内投与により消炎しつつ画像評価を行ったところ、単胞性の腫瘍性病変を認めた。入院5日目で消炎を確認し、生検と同時に開窓術を施行した。病理組織学的に単嚢胞型(内腔型)エナメル上皮腫の診断を得た。約1年が経過し、病変の縮小と下顎管との距離が確認されたため、全身麻酔下で顎骨腫瘍切除術を実施した。下顎左側第一、第二大臼歯は治療の過程で保存できなかったが、その後、下顎左側第一、第二小臼歯の萌出は進み、現在、口腔育成は小児歯科に介入してもらい、当科でも経過観察を継続している。腫瘍切除後1年9か月が経過し